

【英語活動】活動提案

コミュニケーション活動を通して、 伝え合う喜びを味わえる英語活動

1. 研究テーマ設定の理由

(1) 学校提案とかがわって

子どもたちが成人する頃には、今以上に国際化が進み、政治、経済、研究といった国、企業、大学レベルだけでなく、旅行、国際交流、ボランティア、インターネットといった個人レベルでもお互いの意志を外国語で伝えなくてはならない場面が多くなることは確実であろう。そこで、初等教育の段階から英語教育を導入する国が増加しているのは世界的な傾向である。

英語は、世界の中で一番広く使われており、中学校で学ぶことから考えても小学校から外国語として学ぶことは妥当であろう。

以上のような理由から、日本でも総合的な学習の時間や他の教科・領域との関連で、英語を小学校から学べる「英語活動」が導入されるようになった。

文部科学省が発表した「平成17年度小学校英語活動実施状況調査」によると、全国公立小学校の93.6%が英語活動を実施している。低学年でも75~76%の学校で行われている。その年間実施時間数は、低学年でほとんどの学校が10時間まで、高学年でも20時間までである。

附属小学校は、上記の全国的な状況を考えると、週1時間、1年生から6年生までの全学年でネイティブ講師と担任が学級ごとに行う「英会話」の授業があり、かなり恵まれた教育環境にある。しかし、教育計画や教育内容、指導方法、評価など、ネイティブ講師に依存することが多い状況である。

したがって、そのような課題を解決していくためにネイティブ講師の依存が強い「英会話」の授業を、担任主体の「英語活動」にする方向を研究することになった。指導形態は担任とネイティブ講師とのチームティーチング(TT)である。

研究学校提案である「互いのまなざしが響き合う学習 — 一人一人の確かなみとりと支援によって —」を、英語活動では、「児童たちが外国語を通してコミュニケーション活動を行いお互いの意志を伝え合う喜びを味わえる学習」とおさえない。そのためには、担任がしっかりと児童たちの興味・関心・意欲や個性までもみとりながら適切な支援をすることが必要となってくる。

(2) めざす子ども像

①英語のリズムや音声に親しめる子ども

英語を使ってお互いの意志を伝え合い、その喜びを味わうためには、私たちが日頃から接している日本語とはかなり違う英語のリズムと音声に慣れることは必要不可欠であ

る。

②英語を使って、お互いの意志を伝え合い、英語を使う喜びを味わえる子ども

日本語ではない英語で、お互いの意志を簡単なところから伝えることができる喜びを味わうことは、積極的に外国語でコミュニケーションしようとする意欲や態度の育成につながるものである。

③世界にはさまざまな国や人種、言葉や文化があることを受け入れられる子ども

英語活動では、英語を目標言語として学習するが、その前提として、世界中には多様な国や人種、言語や文化があり、それらを尊重できる態度を養うことが、大切である。

そのために、国際交流活動を組み込み、直接体験できるようにしたい。

2. 英語活動における「互いのまなざしが響き合う学習」

(1) 確かなみとりと支援

「学校提案とかかわって」のところで、「互いのまなざしが響き合う学習 — 一人一人の確かなみとりと支援によって —」を、英語活動では、「児童たちが外国語を通してコミュニケーション活動を行いお互いの意志を伝え合う喜びを味わえる学習」とおさえた。そのためには、担任がしっかりと児童たちの興味・関心・意欲や個性までもみとりながら適切な支援を行うことが必要となってくるのは当然である。

お互いの意志を外国語を通して伝え合うためには、言語面（発音、リズム、イントネーションなど）の力と非言語面（ジェスチャー、アイコンタクト、表情や口調、絵や図など）の力が関わってくる。これらの面でも、みとりと支援を行っていきたい。

(2) 期待される学習成果

英語活動における「互いのまなざしが響き合う学習」により、次の3点を学習成果として期待したい。

①日本語にはない外国語の発音、リズム、イントネーションに慣れ親しみ、英語活動を行う中で、結果的に英語の簡単な語彙や表現を習得することができる。

②外国語によるコミュニケーションへの関心、意欲、態度を養うことができる。

③外国の人々の生活や習慣、文化を受け入れ、自分たちの生活や習慣、文化も伝えることができ、国際理解力が深まる。

3. 研究の展望

(1) 効果的な担任とネイティブ講師とのチーム・ティーチング

ネイティブ講師に子どもたちへの指導を過剰に依存しがちな課題を解決していくためにも効果的な担任とネイティブ講師とのチーム・ティーチングの研究は大事である。

まず、担任とネイティブ講師の役割をはっきりさせないといけない。

ネイティブ講師の役割として、伊藤（2004）は、次の4点を挙げている。

- ・ 生きた英語を提供する。
- ・ 英語の発音や会話のモデルとなる。
- ・ コミュニケーションの相手となる。
- ・ 異文化の情報を提供する。

さらに担任の役割として以下を示している。

- ・ ネイティブ講師とTTをする。
- ・ 児童個々を支援する。
- ・ 授業の管理・運営をする。
- ・ 児童個々を評価する。

これらの役割を分担できれば効果的な担任とネイティブ講師とのチーム・ティーチングが成立しているといえる。これらの役割を分担できるように打ち合わせや授業計画をしっかりと実施していく。

(2) 英語活動と国際交流活動を連携させた単元構成

英語活動で行うコミュニケーション活動で培った関心、意欲、態度をさらに強化するために和歌山大学の留学生やオーストラリアの小学生との交流活動を年間通して組み込んでいく。

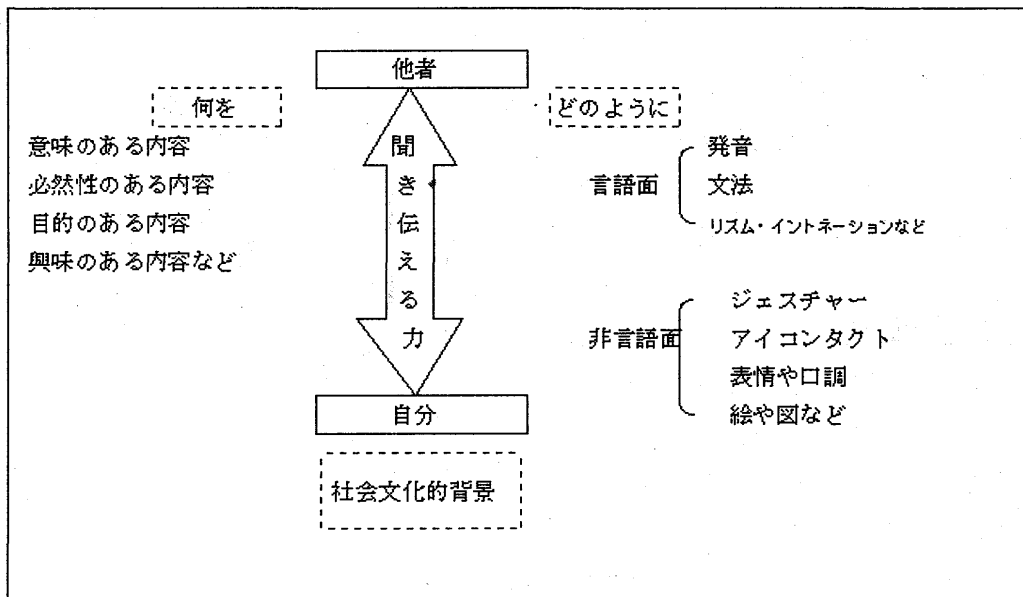
和歌山大学には、多くの留学生が在学しており、附属小学校という学校の状況を考えれば、国際交流活動を計画するのは自然である。また、英語活動のネイティブ講師は、英語圏（イギリス、アメリカ）であり、世界の多様な言語や文化に出会うには、留学生は理想的である。さらに、日本は、アジアに位置しアジアの人々との交流は大切である。この点からもアジア諸国出身が多数を占める留学生は魅力的である。

オーストラリアは、小学校段階から多数の外国語を学習している国で、日本語も多くの学校で導入されている。お互いの言語を初歩で学んでいるという共通した環境があるので交流の意義は大きい。郵送によるお互いの作品を交換することから交流を深めていきたい。

(3) 発達段階に合った学習内容と指導法

外国語（英語）によるコミュニケーション力を、図1に示す外国語の「聞き伝える力」とおさえる。

図1 外国語（英語）によるコミュニケーション力



この外国語（英語）で聞き伝える力の基礎的なところを育成するためには、児童の発達段階に応じた学習内容を構成する必要がある。それぞれの発達段階にある児童の興味関心に合わせて、学習内容を構成し、適切な指導法で英語活動を実施していく。その結果として、子どもたちが「英語って楽しいな。」と思え、英語嫌いをつくりださないようにしたい。

引用文献

伊藤 嘉一編著. 2004. 『小学校英語学習指導指針』小学館